

インタラクティブ空間演習 (女子美術大学大学院)

「表示義」と「共示義」

3章 「2. 分節と意味作用」 pp.109-123
(2014-10-08)

池上嘉彦 著「III. 創る意味と創られる意味—意味作用をめぐる—」、『記号論への招待』

担当: 石井 拓洋
ishii05042@venus.joshibi.jp



2014

「意味」と「指示物」のダイナミクス, pp.98-101

「指示物」が「記号内容」の「意味」に合致していない場合 [2] **復習**

「 比 喩 」 (p. 99)

記号内容
「意味」の範囲 = 〈蝶々という昆虫〉

記号表現
「蝶々」 →  

「指示物」= 〈雪〉?
= 蝶々の「意味」には不一致だが?
矛盾?

「意味」に合致する「指示物」
= 「モンシロチョウ」

・話し手による「比喩」的使用の可能性あり (例: 「まるで「蝶々」のように雪が舞う」)

→ 【効果】 記号が「意味」とする特徴と、「指示物」がもつ特徴との間に緊張関係が生じる 100




「意味」と「指示物」のダイナミクス, pp.98-101

記号は「虚の世界」を創り出す **復習**

(p. 101)

記号
「マンションあるよ」

「虚の世界」のマンション

 →  → 

「マンション」だから、
〈快適〉かもしれない




・「広告・宣伝」で「意図的に利用される」記号の力
・「宗教的なシンボルや詩のことは」での、記号の「基本的な働き」

101

「アイコン」、「インデックス」、「シンボル」, pp.104-108

アイコン (類像) icon **復習**

記号表現と指示物との「類似性」に基づく (pp. 104 - 105)

 →  → 

※ 絵に描かれた「鈴木太郎」
アイコン (類像) としての 記号



※ 指示物 (対象) 「鈴木太郎」くん

人は「アイコン (類像記号)」を 対象における「イメージ」として扱うことで、
「記号」と「対象」との「類推的關係」を結ぶ (石田英敬『記号の知/メディアの知』71)

「アイコン」、「インデックス」、「シンボル」, pp.104-108

インデックス (指標) index **復習**

記号表現と指示物との「近接性」に基づく (pp. 104 - 105)

 → 

物理的な接触 (近接) によって残された足跡
インデックス (指標) としての 記号




※ 指示物 (対象) 「ねこ」

人は「指標記号」を通して、自然の事物の(いま・ここ)の痕跡 (index) を
読みとることによって、「具体的な経験レベル」と「一般的な経験レベル」とを結びつける
(石田英敬『記号の知/メディアの知』72)

「アイコン」、「インデックス」、「シンボル」, pp.104-108

インデックス (指標) index **復習**

記号表現と指示物との「近接性」に基づく (pp. 104 - 105)

 →  ← 

※ 写真の「鈴木太郎」
インデックス (指標) としての 記号

※ 指示物 (対象) 「鈴木太郎」くん

「写真」・「映像」


被写体から放射される光が、(物理的に)フィルムに残す光の〈痕跡〉

「アイコン」、「インデックス」、「シンボル」 pp.104-108

シンボル (象徴) symbol
記号表現と指示物とがコードで関連付けられる (pp. 104 - 105)

復習

「こんにちは」



指示物 (対象) 「挨拶」

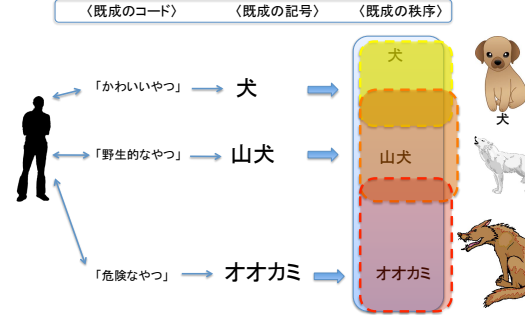
日本語のコードで規定された挨拶用の記号
シンボル (象徴) としての記号

「象徴記号」によって、人は、「一般性のレベル」(抽象的なレベル)で対象を表意する。それは(いま・ここ)にある「具体的な個物」を指し示すものではない (石田英敏『記号の知/メディアの知』74)

「分節」と「コード」 pp.109-110

・記号は意味作用を通じて、〈ひとつながりの対象〉を「同じ」と「異なる」ものに区分する。

〈既成のコード〉 〈既成の記号〉 〈既成の秩序〉



「かわいいやつ」 → 犬 → 犬

「野生的なやつ」 → 山犬 → 山犬

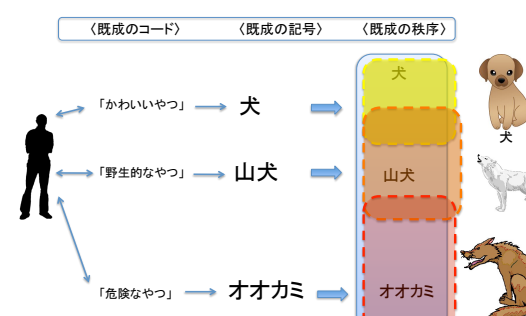
「危険なやつ」 → オオカミ → オオカミ

© Takuyo ISHII (Joshi Univ.), 2014

「分節」と「コード」 pp.109-110

・記号は意味作用を通じて、〈ひとつながりの対象〉を「同じ」と「異なる」ものに区分する。

〈既成のコード〉 〈既成の記号〉 〈既成の秩序〉



「かわいいやつ」 → 犬 → 犬

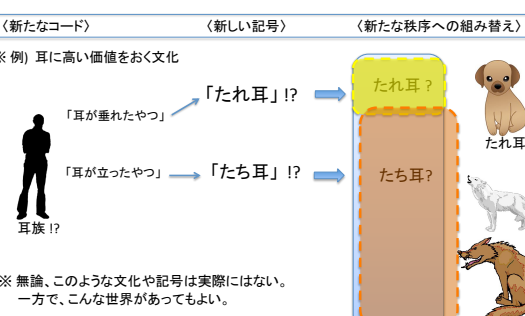
「野生的なやつ」 → 山犬 → 山犬

「危険なやつ」 → オオカミ → オオカミ

「分節」と「コード」 pp.109-110 (p.110)

〈新たなコード〉 〈新しい記号〉 〈新たな秩序への組み替え〉

※例 耳に高い価値をおく文化



「耳が垂れたやつ」 → 「たれ耳」!? → たれ耳?

「耳が立ったやつ」 → 「たち耳」!? → たち耳?

耳族!?

※ 無論、このような文化や記号は実際にはない。一方で、こんな世界があってもよい。
→ 新記号による〈新たな世界〉の提示!?! = アート!?

「コードと意味作用」 pp.110-113 (p.110)

「同じ価値を有している」という場合の「同じ」とはどういう特徴なのか?

「異なる価値を有している」という場合の「異なる」とはどういう特徴なのか?



「かわいいやつ」 犬 → 犬


「野生的なやつ」 山犬 → 山犬

「危険なやつ」 オオカミ → オオカミ

「コードと意味作用」 pp.110 - 113 (p.111)

記号

X Y Z




記号を適用できる
対照群がそなえら
べき特徴の項目

a a b

b c c

「コードと意味作用」 pp.110 - 113

記号 X Y Z



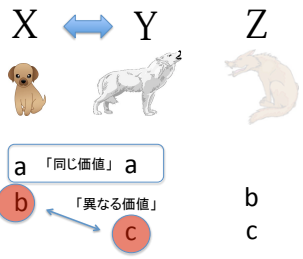
「この記号体系は 三種の異なる対象を区別して指すのがその役割である」

それぞれの記号が正しく区別されるためには、それぞれで異なる特徴に注目しなくてはならない。

(p.112)

「コードと意味作用」 pp.110 - 113 (p.111)

記号 X ↔ Y Z

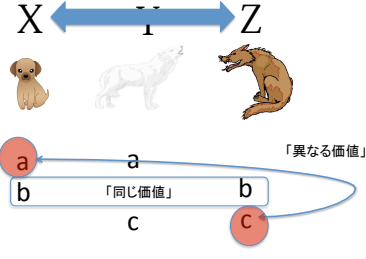


記号を適用できる対照群がそなえるべき特徴の項目

XとYは「異なる」 $b \neq c$

「コードと意味作用」 pp.110 - 113 (p.111)

記号 X ← Y → Z

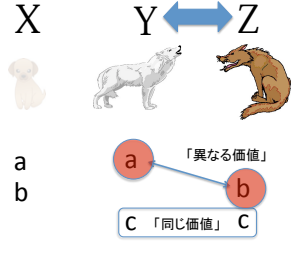


記号を適用できる対照群がそなえるべき特徴の項目

YとZは「異なる」 $a \neq c$

「コードと意味作用」 pp.110 - 113 (p.111)

記号 X Y ↔ Z




記号を適用できる対照群がそなえるべき特徴の項目

YとZは「異なる」 $a \neq b$

「コードと意味作用」 pp.110 - 113

それぞれどちらがう？

記号 X Y Z



「この記号体系は 三種の異なる対象を区別して指すのがその役割である」 (池上、p.112)

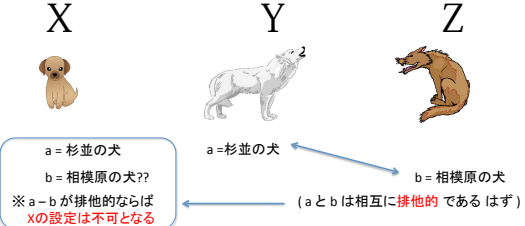
「差異によってしか、記号に機能を与えること、価値を与えることはできません」

※ (F・ソシュール『ソシュール一般言語学講義:コンスタンタンのノート』、影浦映ら訳、p.177)

※ しかし、、、(余談 その1) (p.111)

※しかし、池上氏の PP.111-112のモデルは現実には適用できない。

X Y Z



【理由 1】
XとZのが異なるのは a-bによる差異による。つまり、a-bは相互に排他的な関係となる。しかし、そうであればXは排他的なはずの a-b が共存することになる。これは不可能。

※ しかし、、、(余談 その2)

※ しかし、池上氏の PP.111-112のモデルは現実には適用できない。(p.111)

a = 杉並の犬
b = オス
c = 屋外にいる

(不明。杉並の犬かも?)
(不明。オスかも?)
(不明。屋外にいるかも?)

【理由 2】
そしてまた、差異を決定するための比較項目同士が全て適切ではない。例えば、池上氏はYとZの差異をaとbとの差異に根拠つける。しかし、「杉並の犬」か「オス」かの比較では差異を決定づけることはできない。言うまでもなく、Zが杉並の犬か否かが重要な基準のはずである。

「示差的特徴」 pp.113 - 114 (p.113)

示差的特徴

記号内容の規定において、「差異を規定するものとして機能している特徴を『示差的特徴』と呼ぶ」

「示差的特徴」 pp.113 - 114 (p.114の図)

「示差的特徴」

「差異を規定するものとして機能している特徴を『示差的特徴』と呼ぶ」(p.113)

「対立」と「中和」 pp.114 - 117 (p.114の図)

「対立」
= 共通性を踏まえた差異

「『対立』の概念には、共通性を踏まえた上での差異という意味合いが含まれている」(p.115)

「対立」と「中和」 pp.114 - 117 (p.114の図)

「uncle」 系統面
「father」 性別面
「son」 世代面

「対立」

重要
「対立の相手が変われば、またそこで違った面での差異が際立たせられる。潜在的なさまざまな意味作用の可能性が、つぎつぎに顕在化される」(p.115)

「対立」と「中和」 pp.114 - 117

「対立」

「対立」と「中和」 pp.114 - 117

man <男性の人間> woman <女性の人間>
 <人間>

(p. 116)

「中和」

「『対立』が停止されている状況を『中和』と呼ぶ」
 「『人間』という意味での“man”においては、性に関する対立が中和されている」

「有徴」と「無徴」 pp.117 - 120

man <男性の人間> woman <女性の人間>
 <人間>

「無徴」 「有徴」
 「対立が中和された項」 「対立を保持したままの項」

(p. 117)

「有徴」と「無徴」 pp.117 - 120

dog <オスの犬> bitch <メスの犬>
 <犬>

「無徴」 「有徴」
 「対立が中和された項」 「対立を保持したままの項」

※ son of a bitch : 【卑語】 男性に対して “くそ野郎”

「有徴」と「無徴」 pp.117 - 120

actor <男性の俳優> actress <女性の俳優, 女優>
 <俳優>

「無徴」 「有徴」
 「対立が中和された項」 「対立を保持したままの項」

【対象への意味づけにおいて】
 「無徴項は優性、有徴項は劣勢、という意味づけを伴っていることが広く見られる」

「有徴」と「無徴」 pp.117 - 120

poet <男性の詩人> poetess <女性の詩人>
 <詩人>

「無徴」 「有徴」
 「対立が中和された項」 「対立を保持したままの項」

「もともとそのような範疇の人間に（女性）が珍しかった [= 文化的に有徴であった] という事情を反映するものであろう」 (p. 119)

「有徴」と「無徴」 pp.117 - 120

bee <メスの蜂> drone <オスの蜂>
 <蜂>

「無徴」 「有徴」
 「対立が中和された項」 「対立を保持したままの項」

蜂に（オス）が珍しかった [= 文化的に有徴であった] という事情を反映するもの

「表示義」と「共示義」 pp.120 - 123

(p.122の図より)

「共示義」 コノテーション connotation

表示義をふまえたより高次の意味。 比喩など (※「共示」とも)

「表示義」 デノテーション denotation

字義通りの意味 (※「外示」とも)

「すでに、、、記号として成立しているものが全体として記号表現となり、それに新しく何らかの記号内容が対応する形」 (p.120)

「表示義」と「共示義」 pp.120 - 123

共示義 コノテーション	rose 記号表現 = シニフィアン	↔	愛 (+ 薔薇) 記号内容 = シニフィエ
表示義 デノテーション	rose 記号表現 = シニフィアン	↔	薔薇 記号内容 = シニフィエ

(表示義 = すでに記号として成立しているもの)

「すでに、、、記号として成立しているものが全体として記号表現となり、それに新しく何らかの記号内容が対応する形」 (p.120)


「表示義」と「共示義」 pp.120 - 123

共示義 コノテーション	rose 記号表現 = シニフィアン	↔	愛 (+ 薔薇) 記号内容 = シニフィエ
表示義 デノテーション	rose 記号表現 = シニフィアン	↔	薔薇 記号内容 = シニフィエ

「このような場合、[共示義には] くばらの意味もまだ生きているのであるから、いわば二つの異なるレベルで意味作用が二重で起っているわけである」 (p.120)

「表示義」と「共示義」 pp.120 - 123

「共示義」は「表示義」よりも高次のレベルでの意味作用。 Loveの語によって伝わる(愛)とは同じではない。 (pp.121 - 122)




共示義 コノテーション	rose 記号表現 = シニフィアン	↔	愛 (+ 薔薇) 記号内容 = シニフィエ
表示義 デノテーション	rose 記号表現 = シニフィアン	↔	薔薇 記号内容 = シニフィエ

「表示義」は文字通りの意味作用

画像: www.clipartbest.com/

「表示義」と「共示義」 pp.120 - 123

「『共示義』というものは、本来、既存の何か[※「バラ」や「愛」など]を超えたレベルでの新しい意味作用の可能性の提示という性格をもつ」 (暗示、比喩、象徴、連想による意味作用) (p.122)



共示義 コノテーション	rose 記号表現 = シニフィアン	↔	愛 (+ 薔薇) 記号内容 = シニフィエ
表示義 デノテーション	rose 記号表現 = シニフィアン	↔	薔薇 記号内容 = シニフィエ

画像: www.clipartbest.com/

「表示義」と「共示義」 pp.120 - 123


映像、広告、絵画、音楽など、さまざまなジャンルに置き換えて考えたい。

「共示、コノテーション connotation [※ 共示義]

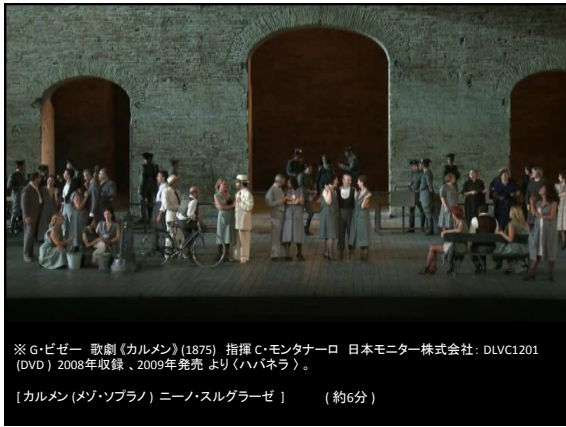
ある表現(言葉、映像、記号)の一義的な意味を超えた暗示、比喩、象徴あるいは連想等による意味。 → 外示」

「外示、デノテーション denotation [※ 表示義]

ある表現(言葉、映像、記号)のなかに現れた字義どおりの意味。たとえば、「バラの花」の映像の場合、象徴や暗示をふくまない、そこに見えている通りの外面的意味。 → 共示」



※ ジェイムズ・モナコ「映像用語集」『映画の教科書: どのように映画を読むか』414, 411頁。



以上

スライド中の「※」マーク 以下は、使用テキスト内にはない記述を示す